

## 獵師と白鳥乙女

パウル・ツァウネルト編『グリム以降のドイツ昔話』十一番

鈴木 満 訳・注・解説

昔むかしのこと、ある若い獵師がご主人の王様に大層なご奉公をしました。王様はその礼に褒美をつかわそう、とお考えになり、何か望みはあるか、とお訊きになりました。

「陛下」と獵師は申しました。「こちらの湖の畔ほとりにけっこうな地所がございまして、森が一山ついております。あれを頂戴できますれば」。

「まことに申し分ない」と王様。「あの莊園は王領のひとつじゃ。そのほうに下賜いたすぞ」。

そこで獵師は年取ったおつかさんと一緒にそのりっぱなお屋敷に引つ越しました。母親は所帯を切り回し、獵師はせつせと狩りにでかけました。でも獵師はある日不思議なことにでくわしました。これも運命さだめというもの。

獵師が湖にほど近いところにおりますとね、三羽の雪のように白い白鳥が飛んで来て、岸辺に降り立ちました。それから獵師が見ていると、不意に白鳥じゃなくて三人の乙女が湖のなかに歩いて行き、水浴びを始めたのです。乙女

たちはすばらしく綺麗で、眺めるのが怖いくらいでしたよ。しばらくすると女の人たちはまた水から出てきて、白鳥の姿になると飛んで行ってしまいました。狐師はつくづくびっくりしてうちに帰りましたが、そこへの道筋はしっかりと覚えておきました。次の日同じ刻限に湖に行くと、同じことが起こりました。三人の白鳥乙女のこと①はもう頭から離れません。丁度結婚したいな、と思っていたので、三人のうちで一番若くて一番綺麗なのを絶対女房にするぞ、と決めこんだものです。三日目また同じ刻限に乙女たちが湖で水浴しているのを見つけると、彼は抜き足差し足で忍び寄って、一番若い娘の白鳥の衣を奪って持って来ました。他の二人は帰ってしまいました。一番若い子は彼の後を追いかけて来て、衣装を返してちょうだい、と嘆き悲しみました。でも狐師は何も聞かぬふりをして、いっぺんもうしろをふりむかず、家に着くまで、頼んだり泣いたりしている白鳥乙女がついてくるまま放っておいたのです。帰りつくと母親から着物を一枚乙女にもらってやって、それで我慢するように、って言ったものです。白鳥の衣はこっそり小箱に入れて、隠してしまいました。こうして乙女は狐師のうちにいなければならなくなりました。うちの人たちは乙女の眼を見て望みがわかると、すぐさまそうしてやりました。彼女の方も若い狐師が好きになりましたから、狐師が、自分と結婚してもらえるか、と訊ねると、ためらわずに

「ええ」と言いました。

そこで狐師は自分の立派なおうちをこれまでに獲物にした鹿の枝角のありつたけで飾り、町へにかけて妻のために手に入れられる限りで一番美しい服を買いこみました。まもなくご婚礼が祝われて、飲めや歌えの大騒ぎ。天国がコントラバスやチェロで一杯になったみたいでしたよ。

狐師は妻と年取った母親と一緒に、森のふちのおうちで何不自由なく楽しく暮らし、一年、また一年と過ぎて行きました。狐師のうちにはもう子どもが二三人できたものです。ある日のこと、狐師がまた狩りに出た留守、妻と母親

はうちの仕事をせつせとやっていました。母親がふと例の小箱を見つけて、それを開けました。するとあの白鳥の羽衣が入っているのが見えました。

「あれまあ」と母親は言いました。「ほら、ごらん。ここにおまえの白鳥の衣があるよ。——とつても綺麗で、だあれも触ってない」。

若妻はそれを見るなり、手をのばしました。それからやおら着物を脱ぐと、白鳥の衣をまとい、こう言いました。

「母様。私にまた逢いたいという人はガラスのお山に来なくてはなりません。そのお山は広いひろい原っぱにあるのです。私は魔法にかけられた王女で、そこへもどらなければいけないのです。いとしいだんな様とかわい子子どもたちによろしく言ってくださいましな。それではご機嫌よろしゅう」。そうして舞い上り——いなくなつてしまいました。年取つた母親は、なにかもこんな急に起こつたので、なにがなにやらろくすっぽ訳が分かりません。

森のうえを飛んでいるときお姫様は、たくさんの樹のあいだにもう一度夫の姿が見えないものか、と探しました。すると見つかりました。

「ご機嫌よう、大好きなあなた」。頭のうえを飛び去りながらお姫様は叫びました。「元気でいてね、それからかわい子どもたちによろしくね」。

獵師はびつくり仰天。

「射たなきやならんか」と彼は考えました。「おお、神様、おれはどうしたらよかろう。あれを射ち殺そうものなら、二度と逢えないのと同じ苦しみを味わうことになる。おお、神様、けれどなんだって女房はおれをこんな目に遭わせるのだ」。

獵師がしょんぼりと家にもどると、母親が、広いひろい原っぱにあるガラスの山のことを話しました。

「おっかささん」と彼は言いました。「おれはもう居ても立ってもいられない。女房を探しにでかけるつもりだ。口では到底言えなくらい、おれはあれを愛してたからな。行方がつきとめられるかどうか、どうしてもやってみなくちゃ」。そうして家を出ました。

まもなくとある荒野にやってきましたが、これは国のずうっと奥地まで延び抜がっています。そこにぼつんぼつんと三人の年取った兄弟が住んでいました。この人たちは隠者で、世の人間との交わりはありませんでした。

しばらく旅をしているうちに獵師は一人目の隠者のところにたどりつきました。

「神よ、われを憐れみたまえ」と老人は申しました。「わしは遙か大昔からここに住んでおるが、長いながいあいだ人間を目にしたことがなかった。そなた、どうしてここへまいられた」。

獵師は相手になにもかも話し、広いひろい原っぱにあるガラスの山を知っているかどうか訊きました。隠者が言うには、

「そうさな、わしは若いころうんとこさ歩き回って随分いろんなものを見た。けれどもガラスの山のことも、広いひろい原っぱとやらのことも耳にした覚えはない。気をつけて旅を続けなされ。もしかすると、わしの弟の一人がまだ息災でいるのでくわすかも知れぬ。これが心得ていようかもな。わしら兄弟はうんと以前に別れわかれになったで、いつか再会するときの目印にお銭を一枚めいめい持っていることにした。さあ、そなたにこのわしのお銭をあげよう。わしの弟に渡すがよい」。

それから獵師はまた旅をしました。そして心底悲しくなりました。

「でも」と獵師は考えました。「あれがこんな風に世間をさまよっているとしたら、おれもたしかにそうしなければならぬのだ」。

随分荒野をめぐり歩いてから、彼は二人目の隠者のもとにつきました。

「神よ、われを憐れみたまえ」と老人は申しました。「わしはこの前いつ人間の姿を見たか思い出せぬわい。そなた、どうしてここへまいられた」。

獵師は相手になにかも話し、一人目の隠者にもらった錢をさしました。

「それではわしの兄者はまだ健在か」と老人は言いました。「そうさのう、わしは若いころうんとこさ遍歴をして、うんとこさ見聞を広めた。けれどもガラスの山のことも、広いひろい原っぱとやらのことも耳にした覚えはない。氣をつけて旅を続けなされ。もしかすると、わしの末の弟がまだ元氣でいるのにくわすかも知れぬ。これが心得ているかも分からん。さあ、そなたにこのわしのお錢をあげよう。あれに渡すのだよ」。

そこで獵師はまたまた旅を続けました。物思いに沈みながらてくてく歩いておりますと、とある繁みに行き当たったのですが、そこに一頭の牡牛が死んで仆れていましたね、そのそばに一頭のライオンと、一頭の風グレイハウント犬と、一羽の鷲と、一ぴきの蟻がうずくまっていました。通り過ぎようとしたのですが、この四つの動物たちは彼を引き留めて、どうかみんなにこの死んだ牡牛を分配してください、と望んだのです。そこで獵師はそうしてやりました。

ライオンにはこう申しました。

「貴公はな、口がでつかくて、いつもそれをいっばいしておかにならん。だから肉をもらうのだ」。そうして肉を全部投げてやりました。

風犬にはこう指図しました。

「おぬしは骨を引きずり回して、こりこり齧るのが好きだて。おぬしの氣に入りのところを取るがいい」。そうして骨を全部投げてやりました。

驚にはこう伝えました。

「お手前は喰い物を突つつきまわすのが好み」。そしてはらわたを全部投げてやりました。

蟻にはこう言ったものです。

「おまえは喰い物のなかに潜りこんでいるのがなにより好きだ。この頭のなかを這い回るのがよからう」。

それが済むと先へ行きました。だいぶんな道のりをこなしたところで、風犬が追っかけて来て、どうか引返してください、みんなお礼をしたがっています、と頼みました。獵師はそんなことはどうでもよかったです、それでも風犬と連れ立って他の者のところにもどりました。

「うん、うん」と獵師。「気持ちはいれしいが、私は礼をもらおうと思って牡牛をそなたらに分けたわけじゃないんだ」。

するとライオンは体から毛を一本抜き取って、それをよこして言いました。

「いつか困った羽目になったら、この毛を曲げてみられい。さすれば、ご貴殿はライオンの恰好になって、我輩の三倍の力が出ますぞ」

犬も体から一本の毛を引き抜いて、こう言いました。

「いつか困った羽目になったら、この毛を曲げてください。すると君は風犬の姿になって、ぼくの三倍の速さで走れます」。

それから驚は体から一枚の羽根を抜き取って、それをくれて、こう言いました。

「いつか困った羽目になったら、この羽根を曲げなされ。すると足下は驚に化け、それがしより三倍の速さで飛ぶことが叶います」。

そうして蟻は体から脚を一本もぎ取って、それを渡して、こう言いました。

「いつか困った羽目になったら、この脚を曲げてごらん。するとあなたはあたしの三倍もちつちやくなるからね」。

さてそれからしばらくすると、狐師は三人目の隠者のところにやって来ました。

「神よ、われを憐れみたまえ」と相手。「最後に人間の姿を見たのがいつのことやら、わしにはもはや思い出せぬ。

そなた、どうしてここへまいられた」。

狐師は物語り、二人目の隠者にもらった錢を渡しました。

「それではわしの兄上がたはまだ生き長らえておいでか」と老人は申しました。「のう、せがれや、なんとかそなたを助けてやりたいものじゃ。たしかに、もう昔のことじゃが、広いひろい原っぱにあるガラスの山のことをいくらか聞いたことがある。したが、その山は呪われておつてな、途方もない力を持った者にしかその呪いは解けぬ、ということだ。そこへ登るのは難儀だとの話だし、てっぺんには蟻がやつと潜りこめるちっほけな裂け目があるだけなのじゃ」。

「分かりました」と狐師はこたえ、老人にお礼を言って、また出発しました。

さて荒れ野から出ると、広いひろい見渡すかぎりの大草原にでくわしました。そうやってずんずん先へ先へと歩いて行くと、遠くからガラスの山が見えました。急いであの羽根を取り出し、曲げると、驚の姿になって舞い上がりました。本当だ。てっぺんにたった一つ小さな裂け目が見つかった。狐師は急いで蟻に変身すると、這いずり降りて行ったの。やがてどん底に立っている一軒の家につきました。家の窓際にお爺さんが一人座っていて、窓から外を覗いていました。これは魔法に呪われた王様で、王様の王国全部、御殿のある城下町、三人の姫君がた、部下の兵隊たちや召使、その他ありとあらゆるものが、皆みんな魔法にかけられているのです。

狐師は蟻に化けたままでお年寄りのそばを這って通りすぎ、一つ目の部屋に入りますと、そこには一番上の王女が座っていました。二つ目の部屋には二番目の王女がおりました。三つ目の部屋まで行くと、自分の奥さんが見つかったのです。王女はちっけな蟻んこが衣装のうえを這い回っているのに一向気づかず、とつても悲しそうに座っていました。でも、お昼のご飯ができました、と呼ばれると、立ち上がって鏡の前へ歩み寄りました。そのとき狐師は元の姿にもどり、自分も鏡を覗きました。王女は鏡のなかにその顔を見つけると、びっくりして、急いでうしろをふりむきました。けれどなんにも見えません。なぜって、狐師はまた蟻に化けてしまっていたからです。彼女がもう一度鏡に見入ると、狐師もそうしました。

「いとしいだんな様」と王女は言いました。「ここにいらっしやるのね。どうかお姿を見せて頂戴」。

そこで狐師が本当の恰好になって進み出ると、奥さんは相手の首っ玉に抱きついて、なにもかも話してもらいました。

それが済むと彼女は言いました。「ああ。私たちがどうすれば呪いから解かれるのか、私に分かっていればなあ。ここではなにもかも魔法にかけられているの。どうしてもお父様に訊いてみなくちゃ。あなた、また蟻さんになってください。私、あなたを襟に乗せて運んで行きます」。

狐師は言われたようにしました。さて、皆が食卓につくと、王女はこう申しました。

「ああ、神様、私たち、いつになったらいいかげんに魔法を解かれるのかしら」。

「おお」とお姉様がたが叫びました。「あなたがつかまえられなかったら、私たち、とつくの昔に救われていたかも知れないのに。あのころ、私たちはもつとずつとひどく呪いをかけられていたわ」。

「嬢や」とお歳を召した王様がおっしゃいました。「わしらはたしかに救済されることも可能であろうが、難しいこ



と。なによりまず、この近くの貴族が毎日二十匹の豚をみつぎものにしておるあの十二の頭を持った竜を殺さねばならぬ。なれど、こやつをだれかがやつつけて最後の頭を斬り落としても、この頭から兎が一羽飛び出す。これをなんとしても捉えるのだ。この兎を殺すと、その頭から鳩が一羽飛んで出る。素早く立ち回ってこの鳩をひつとらえ、是非とも殺すのじゃ。こやつの頭のなかには小さな石があるだろうから、これをここのわしらのうえのあの小さな裂け目から山のなかに投げ込まねばならぬ。したが、わしらを救つてやろうというだれかに、どうしてこうしたことを逐一教えてやれよう。小さい蟻にでもなつて、わしがこんな風にしゃべっているのを聞いておれば別じゃが」。

王女は口をつぐんでおりました。彼女はお昼のお膳からいくらか食べ物を取ると、それを持って自分の部屋にもどり、だんな様に食べさせました。夫は何日かのあいだそこにかくまわれていましたが、やがて、その貴族とやらのところに行つて、豚飼いとして雇ってもらうつもりだ、と言いました。もつとも、ガラスの山から外へ出るのはたやすくはありませんでした。なるほど、狐師は蟻んこに化けて、壁を伝つて這い上がろうとしました。でも、壁はつるつるで高いこと、高いこと。いや、いや、まったく容易なことではありませんでしたよ。とうとう外に出られたので、貴族を探し当てる、豚飼いとしてお仕えしたい、と申し出たものです。

「よかろ」と貴族はこたえました。「おまえを雇おう。だがな、こんないい若い者にはそもそももつたいない仕事なので。豚どもが散らばらぬよう一つ群れに駆り立てて行く腕がおまえになけりや、大変なことになるぞ。そういう場合ふつう、豚飼いは竜の最初の朝飯になつてしまうから」。

でも狐師はびくともしないで、翌朝二十びきの豚を連れて、竜がいつも食事をする野原にでかけました。けれども、竜の機嫌を損ねないように豚どもと一緒にまとめておかずに、脅かしてそこいら一円に散らばらせました。あそこに一ぴき、こちらに一ぴき、というぐあい。そこで竜はかんかん腹を立て、豚飼い目掛けて突進して来ました。する

と獵師はライオンの毛を手を取つて、これを曲げ、ライオンの姿になると、竜に襲いかかったものです。長いこと闘つて彼は竜の頭を二つ取りました。竜が言うには、

「おれ様が豚の血を二三滴飲めさえずりや、もつと力が出るものを」。

「まったくだ。パン屑が一かけらでもありやあなあ」と獵師はつぶやきました。

こうして両者は別れ、獵師は豚どもを追い立てて、家路につきました。貴族は窓辺に立っていました。豚飼いが二十ぴきの豚を全部引き連れて帰つて来たのを見て、我れと我が目を疑いました。

次の日の朝になると獵師はまたしても豚を駆り立ててでかけました。なにもかも昨日と同じようでした。でも今日ライオンは竜から頭を四つ分捕りました。

「おれ様が豚の血を二三滴飲めさえずりや」と竜。「もつと力が出るものを」。

「まったくだ。パン屑が一かけらでもありやあなあ」と獵師は言いました。

それから彼は二十ぴきの豚と一緒に帰つて来ました。

「なあ、おい」と貴族は召使に言いつけたもの。

「明日はどうなることやら知りたいものだ。おまえ、豚飼いのあとをこっそりつけて行つて、あれがやることを見届けてこい。だがな、あれの力が失せた場合に備えて、葡萄酒とパンを持参するがよい」。

そこで召使は一瓶の葡萄酒と自家製のパンを持って、次の日の朝獵師が豚を追つてでかけるとき、あとからついて行きました。もうほとんど全部の頭が斬り取られてしまつと、竜はこう申しました。

「おれ様が豚の血を二三滴飲めさえずりや、もつと力が出るものを」。

「まったくだ。パン屑が一かけらでもありやあなあ」と獵師。

召使はすぐさま躍り出て、瓶の首を打ち落とし、それをパンに添えて獵師に渡しました。こちらは葡萄酒をがぶりがぶりと飲み干し、パンにはくばくばく食いつきました。それからまた竜に立ち向かい、残りの頭を斬つてしまいました。一番最後の頭から兎が跳んで出ます。でも獵師はもう風犬になっていて、跳びかかって兎を噛み殺してしまいます。すると兎から鳩が出ました。すぐさま獵師は驚に化け、鳩を捻り潰し、鳩の頭から石を取り出し、意気揚々と貴族のもとにもどりました。

貴族は心底喜んで、獵師を何日か引き留め、盛大におもてなしをしました。それからわが獵師は、魔法にかけられた王国であるガラスの山の呪いを解くために、そこを出立しました。彼は山の頂きに飛んで行くと、小石を投げこみました。それから急げるだけ急いで山から離れました。でもまだ遠くに行かないうちに、物凄いだかあんという音が聞こえました。これでもなにもかも魔法が解けたのです。

すべてがまたしいんとなると、獵師は呪いから救われたお城めざして歩いて行きました。彼の奥さんは窓辺に立っていて、すぐだんな様だと分かりました。迎えに行こうとお城から走りだすと、お姉様がたは叫びました。

「いったいなんのつもり。またまた何をしようってえの。救われたばかりなのに、新規まき直しに私たちを破滅させる気なの」。

でも王女は耳も貸さず、お父様とお姉様がたに、

「あれが私たちを救ってくれた方よう」と叫び返して、だんな様めがけて走り寄り、首つ玉にすがりつきました。

さてまあこれでお分かりでしょうが、皆とつても幸せになりましたよ。年取ったおつかさんと子どもたちは、お迎えに行つて手元に引き取りました。王様はお国を婿殿にお譲りになり、この世を去るまでみんな一緒に幸福に楽しく暮らしましたとさ。

注

(1) 白鳥乙女 Schwanenjungfrau 白鳥の姿をした民間伝承上の女性。白鳥の衣を脱ぐと、美しい乙女の姿となる。この衣装を奪われ、隠されてしまうと、通力を失い、それを奪った男の思うままに妻となる。北欧においては、北欧神話の大神オーディン（ヴォーダン）に仕えるヴァルキュリエ（Walkyrie）——戦場を飛行して勇敢な戦没戦士を選び、その魂を永遠の宴がおこなわれるヴァルハラへ連れて行くのが役目——のイメージとしばしば混合している。

白鳥乙女を主人公とする物語は世界的な規模で分布している。一般には半神半人的存在の乙女が、白鳥の姿となる衣を脱いで泉・湖などで沐浴していると、それを垣間見た男が恋に落ち、その衣を盗んでしまう。乙女は故郷に帰れないまま、男の言うなりに結婚する——子どもまでもうける場合も少なくない——が、やがて奪われた衣を発見、これを纏ってその生国（多くは超自然的世界）へ飛んで行ってしまふ。通常、夫は妻を慕ってその跡を追い、艱難辛苦のあげく再会、夫の誠実さにくれた妻が心を許し、また幸せな結婚生活にもどる。これがAT四〇〇「失踪した女房を捜す男」型である。日本の羽衣説話は前半で終わってしまふ。

(2) 「……ちっちゃくなるからね」。これはAT五五四「動物の恩返し」のモテイーフである。旅に出た三人兄弟の末子が、途中動物たちを助ける。あるいは獲物の公平な分配法を教えて感謝される。動物たちはお礼に自分たちの体の一部を主人公にあたえ、困ったときには援助する、と約束する。後に主人公はこれらの動物の助けを借りて難題を解決、姫君と結婚する。この型の物語を収録している記載昔話としては、十四世紀ベルシヤの「鸚鵡物語」<sup>1)</sup>（邦訳には田中於菟弥「鸚鵡七〇話」平凡社東洋文庫三）がある。

(3) ……小石があるだろう。この小石はガラスの山を聞く鍵というより、王一族と王国に呪いをかけた魔法使いの魂、または心臓であろう。AT三〇二「卵の中に心臓を隠している鬼」型の物語に出てくるモテイーフでは、鬼、巨人、怪物、ないし邪な魔法使いが、自分の力の根源を幾重にも手段を講じて守っている。主人公がこの強力な防衛機構を突破すると、最後に出て来る鳥あるいは虫、もしくは卵の中に魂、または心臓が納まっている。アジアでは前者、つまり鳥・虫の中、ヨーロッパでは後者、つまり卵の中にあることが多いと、S・トンブソンは指摘している（S・トンブソン著・荒木・石原訳「民間説話」理想社・現代教養文庫・上・六七ページ）。

(4) ……とつくの昔に救われていたかも知れないのに。どうもこれだけでは話の筋が見えない。憶測を試みる。悪い魔法使いがこの姫に懇望した。手ひどく拒絶され、そのため王国全体を呪った。しかし、姫の懇望に負け、姉たちともども東の間の外出を許した。が、よりによってこの末の姫が衣を奪われて他の男の妻となったので、大いに腹を立て、呪いを継続している、という設定か。

解説

この訳文・注は論文資料に過ぎないことをお断りしておく。

テキストのタイトルは、*Der Jäger und die Schwänenjungfrau* である。出典は以下による。

Hsg. von Paul Zannert: *Deutsche Märchen seit Grimm. 1912/72. Neuauflage in einem Band. Bearbeitet und mit Nachweisen versehen von Eilfriede*

Moser-Rath. Eugen Diederichs Verlag 1976.

右のモースラーの解説によれば、これは初版第一巻の二三三ページ以降。ツァウネルトはこの話を以下から採録した。

Elisabeth Lenke: *Volkshänliches aus Ostpreußen. 2. Teil. Mohrungen 1887*

注を通読すればすでにおのずと明らかだが、広く流布している「白鳥乙女」の話が、ここではA T五五四「動物の恩返し」型と結びついている。恩義を心得ている動物たちは、動物に変身するという能力を主人公にあたえ、彼が失踪した妻と再会し、呪いから救済するのを援助する。いくつかの動物の体に隠されている魔法の石は、A T三〇二「卵の中に心臓を隠している鬼」のモティーフを想起させる。

私がこの民話を訳出したのは、ドイツの文人ヨハン・カール・アウグスト・ムゼーウス（一七三五—一七八七）の『ドイツ民族の民話』所収「奪われた面紗」(Johann Karl August Musaus: *Der geraubte Schleier. Aus Volksmärchen der Deutschen* 1782-86)の翻訳・注・解説(武蔵大学人文学会雑誌第三十二巻第四号所載予定)中の解説を補強するためである。従って本来は、この号に続く号に掲載するつもりだったが、次号発刊は見送りとまったので、前後が逆ではあるが、編集委員会にお願いし、次善の処置としてその前の二・三号合併号に繰り上げて頂いた。

(二〇〇〇年十月三日 受理)

